The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜翻訳＞アンドレ・マルチネ著『ステップから大洋へ：印欧語と「印欧人」』(その6：第IX章(2))
Author(s)	Martinet, André; 神山, 孝夫
Citation	大阪外国語大学論集. 2000, 22, p. 87-112
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79818
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大阪外国語大学論集第22号（2000年）

アンドレ・マルチネ著
『ステップから大洋へ——印欧語と「印欧人」——』
（その６：第IX章 (2)）

神　山　孝　夫　訳

André Martinet†:
Des steppes aux océans
——L'indo-européen et les ≪Indo-Européens≫——.

(Paris : Payot, 1987, 1994[2].)

(Sixième partie : chapitre IX (2))

Traduit par Takao KAMIYAMA

本稿は本誌 17 号 (1977) から 21 号 (1999) に掲載した上掲書訳の続編を成す．第IX章の訳稿は本誌規定の量（400 字詰め原稿用紙換算 100 枚）の二倍に達したため，止む無く二編に分割した．訳稿作成の経緯や方針については下記の同書訳「その１」の冒頭部分を、略語や参考文献については「その１」～「その５」を参照されたい．

校正中の「その５」の末尾に急遽加えたように，原著者は 1999 年 7 月 16 日に永眠された．謹んで哀悼の意を表す．原著の価値を損なうことのないよう無用な誤謬を避けるべく，また時に散見される誤植を訂正すべく，二年余りにわたって原著者と連絡を取りながら慎重に訳稿を作成してきたが，その共同作業も今回掲載部分の途中で途切れてしまうことになったのは，また原著者のご存命中に翻訳を完成し得なかったことは誠に残念である．

原著者が幽冥境を異にされたのを機に，本誌での連載は今回を持ってひとまず終わりとしたい．本誌に続けて掲載をお願いしても，恐らく連載の終了は 2002 年となることが予想され，また，すでに準備段階での訳稿は完成しており，単行本の刊行を目指すのが現実的だからである．渡瀬嘉朗先生をはじめ，ご協力・ご叱正を賜った方々に厚くお礼申し上げたい．

今回の訳稿作成に際し，平成１０年度文部省科学研究費補助金（基礎研究(B)(1)）を一部利用することができた．

第IX章

音韻体系(2)

拡張子 -k-

9.67 本来的な接尾辞，すなわち初源的には母音を持つが，当然その母音が維持されることも消え去ることもあるような要素の他に，子音的な付加要素も存在していることが，比較言語学では早期の段階から指摘されていた．このような子音的付加要素がどのような価値を持つものなのかはあまりよくわかっていなかった．「拡張子」(élargissement) と命名されたものの，これはこの要素を意味論的に規定する際の困難をごまかした呼称に過ぎない．$*H_3$ から w が生じることを考えてみると，語基の末尾でゼロと交替する子音が初源的には実際に無価値の場合があることも理解できる．確かに，このような子音は類推による拡大によって，結果的に一つあるいは複数の意味を獲得することがある．ラテン語では -v- を持つ完了形や色の名称の場合に w が出てくる．基底の $*bhleH_3$-[1]に接尾辞 -o- を加えれば w が生じて flāv-os【> flāvus「黄色の，金色の」】[2]となるが，接尾辞が -ro- だと flō-rus「花の，輝く」である[3]．

9.68 ラテン語の例えば imperātrīx「女帝」の語基末に見られるような -k- は不可思議な「拡張子」である．男性形が imperātor であるのに対し，女性形は -t- と -r- の間の母音を失い，-ī- を付加して構成されている．これは至極当たり前に思える．何しろ女性を -ī- の形で呼ぶことはサンスクリットでは始終行われることであるし，その他の諸言語でもしばしば見られる現象だからである．だが，-k- が加わっているのはなぜであろうか．この場合のように -ia と交替する長音の -ī- には「喉音」が想定されることが知られており[4]，「喉音」，すなわち調音点が後方の舌背摩擦音が，どのような環境の下で硬化して舌背の閉鎖音に転じ得るのかを考えてみたい．

9.69 散見される一連の k の起源を喉音に求める提案を初めて行ったのは Edward Sapir である．彼はギリシア語の完了形の規則的指標である -ka が二つの「喉音」の連続に由来すると考えた[原註 7]．先行するのは，伝統的に言うところの長母音，すなわち母音＋「喉音」に終わ

---

[1] <√*bhel- "to shine, flash, burn; white and various bright colors"(Watkins 1985: 6).

[2] 語幹の長音は類推による．Cf. **9.56**.

[3] 一般には flōs, 属格 flōris「花」から派生したと，また -r- は母音間の -s- からロタシズムによって得られると考えられているらしい．Watkins(1985: 7)は別な語根 *bhel-[3] "to thrive, bloom"を立てる．

[4] ここで用いられている接尾辞は正常階梯 *yā<*yeH_2，ゼロ階梯 *yə<*yH_2 である．Cf. **9.73**. 後者はギリシア語で -ια（単数主格）として現れるが，それ以外の諸言語では問題の -ī に転じる．例えば高津(1954: 164)を参照されたい．本文に記された交替形 -ia は Gk. -ια，すなわちゼロ階梯を指すのか，あるいは **1.34** に記された方針によって記された *yā，すなわち正常階梯を指すのかがはっきりしなかったため原著者に照会したところ，両者を指す旨の回答を戴いた．

[原註 7] Cf. Edgar H. Sturtevant, *The Indo-Hittite Laryngeals*, Baltimore, 1942, p.19.

る語基の末尾に位置する喉音であって，これは特にラテン語で完了形の -w-【=Lat. -v-】として現れる要素に等しい．後続する喉音は完了形の一人称【単数】の語尾【*】-H_2e の初頭の子音である．例えば「与える」という意味の【*】deH_3-を取り上げてみよう．これに【*】-He【=*-H_2e】が後続すれば，得られるのは【*】deH_3-He であって，二つの喉音が合一して -k- に転じると考えられる．ギリシア語に期待されるのは *-doka であるが，類推によって o が延長され，完了形で規則的な初頭子音の重複が行われたため，実際には dédōka という形を取っている．その後 Sturtevant[原註8]は「喉音」が隣接することから得られる k の他の例を検討したが，根拠のないまま「喉音」を想定し，それらが合一して [k] に転じて喉音自体はすぐに消滅したとみなした場合があまりにも多い．このような乱用はあったにせよ，Sapir の想定を退けることはできず，*H+H から k が生じる他のケースも存在している可能性が高い．

9.70　しかし，喉音が [k] に転じる，ずっと生産的な場合がある．-s の前で舌背摩擦音が硬化して閉鎖音に転じる現象である．この現象はゲルマン語に非常によく見られる[原註9]．ドイツ語の書記法からは，今日においてもなおかつ，現在の /ks/ という連続の第一要素がかつて摩擦音であったことが窺い知れる．例えば「狐」を意味し，今日では /fuks/ と発音される G Fuchs【の綴り】は，かつて /fuχs/ という発音が行われたことを物語っている．古い *k はゲルマン語の発達によって通常 /χ/ に転じるのである[5]．

9.71　最も衝撃的なのは Lat. senex のケースである．-x に含まれている /-k-/ が生じるのは，語尾 -s が後続する【単数】主格の場合のみなのである[6]．senex は *senaks からの規則的発達と考えられ[7]，上記の想定を敷衍すれば，これはさらに */seneH_2+s/ にさかのぼり，初期のアクセントは【*】/-neH_2/ の部分にあったと考えられよう[8]．属格の語尾 -es にアクセントがあれば，-n- と -H_2- の間の母音は脱落し，*senH_2-es が得られる．-H_2- に隣接する -é- は -a- となるはずだが，通常の語尾 -es が類推によって復活したと思われる．このようにして規則的に χ【=H_2】が脱落し，「喉音」の痕跡はすべて失われて，属格 *senes が得られるが，これが通常の発達によって senis，すなわち文証される形態に至ることとなる．*seneH_2- に接尾辞 -tu- が加われば，長老の会議を意味する *seneH_2-tu- が得られ，これは規則的に senātu-「元老院」となる．非常に早期のうちに後裔によってこれらの諸形態が確固たる地位を与えられたためか，使用頻度の実に高いこの senex という語に類推が働くことは皆無であって，そのため曲用と派生

[原註8] *Ibid.*, p. 87-89.

[原註9] Cf. André Martinet, Le couple *senex-senātus* et le «suffixe» *-k-*, *BSL* 51, p.42-56; *Evolution des langues et reconstruction*, Paris, 1975, p. 146-168 に再録.

[5] *puk- "bushy-haired" (Watkins 1985: 53)より接尾辞を付した *puk-so- に由来すると考えられている．ゲルマン子音推移(5.61ff.)と o と a の合一を経て，ゲルマン語に期待されるのは *fuχsa- である．

[6] したがって従来は止む無く単数主格とそれ以外とに別々の語幹 *seni-k-, *sen- が想定されて来た．ここに記された見解を採れば一つの語根が再建され得る．

[7] 語頭音節以外の閉音節における *a は Lat. e に転じるのが常則である．Cf. e.g. Palmer(1954: 220).

[8] Eichner の用語で言えば，接尾辞と語尾との間でアクセントの移動が行われる hysterokinetisch 型のアクセントを想定していると思われる．

のパラダイムはまったく不規則的である．そのため比較言語学にとっては非常に役立つ情報源となっている．

9.72　主格のマーカー以外にも，喉音の硬化を引き起こしたと考えられる s がある．それは，文証される諸言語においてアオリストと呼ばれる形態を構成する動詞接辞のマーカーであって[9]，この形態はラテン語の一部の完了形の起源である．【Lat.】vīxit「（彼は）生きた」のような形態を現在形の vīvit「（彼は）生きている」と比べると，$-H_3$ に終わる語基が想定され，この喉音がアオリストの -s- の前で硬化して [k] に転じ，他方母音が後続するときには [w] が残存したと考えられる．接尾辞 -t- の前では語根 $*g^weiH_3$ の母音度ゼロの形 $*g^wiH_3$ が想定され，これが $*g^wī$- となって Lat. vīta「命」[10]や R žit′「生きる」が得られる．母音が後続する場合にも類推によって長い ī が採用され，$*g^wīw$- から Lat. vīvo「（私は）生きる」や R živ′ot「（彼は）生きる」が生じた．接尾辞 -o を加えた場合には，Lat. vīvo-s【＞vīvus】「生きている」，Skr. jīvá-, OCS živŭ[11]で類推による長母音 ī が用いられているが，Gk. bíos（＜*biwos）や Goth. qiwa- には正則的な短い i が現れている．【接尾辞を介さずに】語根から直接形成すれば，【単数】主格の【*】g^wiH_3-s からの【*】g^wik- が【*】g^wiw- と交替することが期待され，これら両者の混交によって OE cwicu 及びそこからの E quick に説明が与えられることになる．

9.73　-k- を -s の前にある「喉音」に由来する接尾辞に似た要素であると考えると，古い時代には，すなわち広く文証され，地域的な改新を受けていない語彙あるいは派生語において，このような -k- が生じるのは長短の a, i, u の後だけであるということに気付く．つまり a の音色や i, u の対応の長音との交替に説明を与える「喉音」が期待されるのはその位置なのである．もちろん最初に扱われるのは語根自体に属す喉音が k に転じた場合，例えば「言語，舌」を表わす R jazy*k*[12]や「魚」を表わす Balt.【=OPr.】zu*k*, Arm. ju*k*n[13]，あるいは上で述べたばかりの「生きる」や「生きている」を表わす語のケースである．だが，最も頻繁なのは初源的に接尾辞 $-eH_2$ を用いた語形成であって，この接辞は語末で通例 -ā となる．その前に -y- が位置することもしばしばあり，その場合に $-yeH_2$ は弱化した $-iH_2$-，したがって語末では -ī の形状を取ることが最も多い．

9.74　-ā に終わる諸形態の中で，-ā が女性を表わしている場合は明らかに別に扱う必要がある．-ā が自然性 (sexe)【としての女性】を表わすのはむしろ最近作られた語についてであって，文法性 (genre)【としての女性】を表わす語のほうがそれより幾分か古い．このような -ā に終わる女性名詞は【単数】主格で -s を取ることはないが，その理由はこの -ā が非統辞的 (asyntaxique) 指示詞 *sā「あの（女性の）もの」に由来するからだと考えてまず間違いない．

---

[9] これを用いたアオリストはシグマ・アオリストや s-アオリストと呼ばれる．

[10] 従来は止む無く vīvus から作った *vīvita よりハプロロジーを用いて説明されていた．

[11] 原著に誤植がある．原著者に確認済み．

[12] ＜$*d\underline{n}g^huH_2$-; Cf. 8. 19.

[13] 祖形の初頭音の再建は難しい．原著者はこの位置に複合閉鎖音を想定する．Cf. 4. 9ff., 9. 101–105.

この点については 10.39 以下で詳述する．男性名詞で -ā（<-eH$_2$）に終わるものはこれとまったく異なる．この場合の接尾辞 -ā は「～する人」のような意味を有しているらしい．例えば，Lat. scrība「写字生」は字を書くことを生業とする人のことだし，agricola は「畑を耕すことを生業とする人」，R voevoda は「兵隊を導く人」を意味している．ラテン語の主格は -s を欠いているが，これは恐らくその発達の何れかの時点で「喉音」の後の -s が規則的に脱落したことに起因している．他方，*politās に由来する Gk. polítēs「市民」，すなわち「都市（ポリス）との関係を有する個人」に見られるように，ギリシア語では -s が現れるが，これは後代に再度付け加えられたものに違いない．

9.75　文法的形態というものは語基と語尾の組み合わせであって，話し手は以前に耳にしたことのあるその組み合わせを繰り返す以外のことはしないのが普通である．問題の形態が不規則的であれば，そうするのが必然となる．しかし，話し手が自己流に語基と語尾を組み合わせるという場合もあり得る．その場合，社会的に認められている形態が不規則的ならば，その人は「誤り」を犯したことになり，誤りは訂正されることになろう．だがこの誤りが他の人々にも模倣され，ついには正しい形態として定着してしまうこともあり得る．上で述べた *seneH$_2$「老人」の主格としての再建形 *sen-eH$_2$-s を例に取ってみよう．この言語の発達の何れかの段階で -χs-【=-H$_2$s-】が硬化により -ks- となれば，[senaks] という発音になる．この語の使用頻度が高ければ，このような発音が維持されることだろう．現にラテン語の前史においてもそうであった．しかし，使用頻度がもっと低ければ，この形態は各々の世代の段階で新たな語基と語尾との組み合わせに置き換えられてしまう可能性がある．その際に用いられるのはパラダイムの他の形態との関係から解き放たれた語基と，一般的に最も広く用いられている語尾である．ここではその結果，[senaks] が [*seneH$_2$-s] に置き換えられたとしてみよう．この時点では [H$_2$] は少し弱まっていたかもしれないが，以前の場合と同じく [a] の音色を定着させ，その長さを母音に与え，それ自身は無音化する傾向があれば，最終的に [senās] が生じることになる．また別の時代に，あるいは印欧語の別の方言において，*H$_2$s が発音しにくいと感じられ，[s] を脱落する傾向が生じたかもしれない．その場合には最終的に [senā] が生じる．このようにして，古い *eH$_2$-s から得られることが期待されるのは以下の４種である：1. [aks]，2. [āks]（語尾が子音である場合（ただし -s 以外）からの類推），3. [ās]（ギリシア語の -ā- 語幹男性名詞のケース），4. [ā]（ラテン語では普通これ）．ただしラテン語では audāx「勇敢な」，mordāx「噛む」等のような一連の形容詞には 2. [āks] が生じている．ギリシア語にも thṓrāx「鎧」，múrmēx[14]「蟻」（<murmāks）のような同じタイプの孤立した形態がある．属格の形は例えば【Lat.】audācis,【Gk.】thṓrākos 等々となる．子音に終わる語基が子音の後に -o- を加えた形で置き換えられるという千年にもわたる傾向によって，-āko- に終わる個人

[14] 原著に誤植がある．原著者に確認済み．

名も生じている．これはスラブ語に頻繁に見られ，一例に Novak[15]があるが，その原義は「新参者」ということである．南フランスには Savignac のように -ac に終わる地名由来の人名があるが，これらはおそらくケルト語の同上の要素に由来している．この名は南フランス以外の地では Savigny とか Savigné のようになる[16]．

9.76 接尾辞 -ey- の母音度ゼロの形 -y- は擬似的な属格的意味を持っており，一部の諸言語では単純な母音となっている．例えば【*】n(e)u「今」（Dan. nu, E now, Lat. nu-n-c）からは，*new-o「新しい」あるいは *new-y-o という形容詞が作られ，後者の場合二つの接尾辞は同じ意味を有している．これは Celt. *Nowio-magos に見られ，文字通りには「新しい市場」ということであって，Noyon[17]の名のもとになっている．*-y-eH$_2$- という組み合わせは，弱化すれば *-i-H$_2$- となり，「～に所属するもの」のような意味になる．例えば狼を意味する *w̥lk^{w}o- を例に取ると，*w̥lk^{w}o-iH$_2$ は「【雄】狼の所有に帰すもの」ということであって，その子供を指すかもしれないし，また当然ながら雌を指すこともある．このようにして Skr. vṛkī や OIs. ylgr「雌狼」が形成される．

9.77 *-y-eH$_2$ の弱化した形 *-iH$_2$（＞*-ī）は自然性としての女性を表わす伝統的なマーカーと考えられた．後に文法性としての女性が生じたのだが，これは最初は指示詞によって，後には拡大されて対応の形容詞によって表わされた．その際，接尾辞 *-eH$_2$，あるいはその発達形 -ā と，自然性の指標たる *-iH$_2$ との競合が生じることとなる．現にこの拡張はラテン語においては歴史的事実である．「雌狼」は古典時代に lupus femina と呼ばれており，改新によって生まれた -a に終わる形 lupa は「売春婦」という派生的な意味に用いられた．既に述べたように自然性としての女性を表わす接尾辞はラテン語では imperātrīx，nūtrīx「乳母」，victrīx「女の勝利者」に見られるように /-īk/ だったのである．フランス語だと vainqueur からは対応の女性の形を作ることができないのに，ラテン語はこの点でフランス語よりも融通が利いて，上記のように victor から直接に女性形を作ることができる．これらの形態の /-k/ は主格で -s の前に立った -H$_2$ が硬化して生じ，類推によって他の格にまで拡大したと考えられる．本来 -i- は短いはずだが，例えば対格の形 *-iH$_2$m は *-īm となるため，このような格形からの類推で長い -ī- に置き換えられている．前述のように，*-eH$_2$(+s) に由来する【*】-āk- を持つ形態には接尾辞 -o が付加されることが多い．例えば *now-āk- は *now-āk-o に置き換えられ，これによって Lat.【対格】pedem，【属格】pedis 等に対する【主格】pēs「足」のように，主格が一音節であって他の格よりも短いような場合を排除し，曲用をなめらかにできるというメ

---

[15] 例えば Cz. Novák.

[16] Larousse に載っている該当の地名には Savignac-les-Églises（ドルドーニュ県），Savigné-l'Évêque（サルト県），Savigné-lès-Beaune（コート・ドール県），Savigny-le-Temple（セーヌ・エ・マルヌ県），Savigny-sur-Braye（ロワール・エ・シェール県），Savigny-sur-Orge（エソンヌ県）が，他方人名にはポスター画家・イラストレーターRaymond Savignac，歴史法学の祖 Friedrich Karl von Savigny 等がある．

[17] パリの北北東，ピカルディー地方の町．人口 14,426（1990）．768 年にシャルルマーニュが戴冠した地として有名．

リットが生まれる．これと平行して，またこれと同じ理由で，-o に対する女性形として，もともと女性形の -īk- にさらに接尾辞 -ā が付加されることになった．Gk. múrmēx「蟻」（<【*】murmāks）が男性名詞なのに対して Lat. formīca[18]は女性名詞，Gk. thṓrāx「鎧」が男性名詞なのに対して Lat. lōrīca は女性名詞であるのはこの類の現象である．最後の例に現れている th- と l- の交替は，【Lat.】dingua と lingua，odor と olor のゆれに類する．同様に【Lat.】amō「私は愛する」の語根【*H_2em-】から amīca「女友達」が作られ[19]，これを基に男性形 amīcus「男友達」が作られたと考えられる．このような平行性は語基に母音を加えていない形を基礎とした諸形態の場合にも見られる．その例には fornix「丸天井」に対する fornāx「天火」[20]があり，前者に現れる短い -i- は音論的に正常であることを見逃してはならない．母音接尾辞を持たない形態が良く保存されているのは，audāx の -āx や nūtrīx の -īx のような生きた接尾辞が用いられている場合である．

9.78　*-iH_2- は「喉音」が [k] に硬化した形で，スラブ語において希に見る発達を遂げた．正則的な -ik-，あるいは類推によって長母音を持つに至った -īk- の両者が用いられる．この接尾辞は -k- の硬口蓋化を経て，幼児形態の【*】at(t)a から作られた指小形 R otec「父」[aˈt′ets] のような -ec や [its]，[itš] に終わる無数の人を表わす形態を構成するのに使われている[21]．

9.79　ここまで喉音の硬化を扱ってきたわけだが，その間ずっと問題の喉音は H_2 と記してきた．この記号は当然のことだが，有声音と無声音，口蓋垂音と咽頭音など様々な音素をまとめて表示したものである．音声学的に言えば，【これらのうち】[k] と記される舌背閉鎖音に最も近いのはドイツ語の ach-Laut に相当する無声口蓋垂音であろう．だが，無声の -s の前では有声口蓋垂音もひとりでに無性化したはずである．

9.80　OPr. zuk に見られるように魚を示す語には常に母音 u が現れるが，このような場合に【k として】具現しているのが果たして *H_2 なのか，あるいは *H_3 なのかは判然としない．だが，H_2 に円唇化が加わったのが H_3 であり，その予期される位置において円唇性が閉鎖音への硬化を妨げるとは思えない．したがって *-eH_3+s は *-ok-s となると考えられるが，類推が働けば【*】-ōk-s や，*-ak^w-s を経て *-ak-s となることもあろう．このように考えれば，「烏」

---

[18] ラテン語の前段階において m-m が bh-m に異化されたと考えられる．

[19] *H_2em-iH_2 > *amik-～ *amī-の混交形 *amīk-に，さらに *-eH_2 > *-ā を付加して形成されている．

[20] *-y-eH_2- のゼロ階梯 *-iH_2- が主格の *-s の前で *-ik- に硬化し，そのまま Lat. fornix に受け継がれた．fornāx に用いられているのは *-y- を欠いた *-eH_2- であり，主格の *-s の前で硬化した *-ak- と，他の形態での *-ā- とが混交して -āk- となった．後者には母音接尾辞 -o- を用いた furnus（<*fornos）なる別形も存在する．昔の天火はドーム型をしていた点に両者の意味的つながりがある．

[21] 原著には地名の構成にも用いられている旨の記載があるが，この接尾辞を有する地名は恐らくほとんどないため原著者に照会したところ，地名は削除する旨の回答を戴いた．-ik- は例外なく硬口蓋化（通例第３と称される）を受けて OCS -ьc-, R, Cz., Pol., etc. -(e)c-, SCr. -(a)c- 等となるが，-īk- は女性名詞を構成するときのみ同じ硬口蓋化を受けてすべてのスラブ語で -ic- となる．他方，-ik-, -īk- に -y- を加えて形容詞を派生させれば，異なる硬口蓋化（通例第１と称される）が生じてそれぞれ R -(e)č-, -ič- が生じる．-ič- は patronymic として非常に広く用いられる．だが，SCr. -ić- は *-īk-y- からは導かれず，*-īk-ti- を想起させることから原著者の記述はこの点において信憑性を欠くと言わねばならない．

等を表わす諸形態が説明できることになる．子音に終わる基底形 *krH_3[22]から出発し，k と r の間の母音を o 階梯とし，接尾辞 -o を加えれば *$korH_3$-o が得られ，H_3 が [w] を残して消え去ることにより，ここから Lat. coru-os【>corvus】「大烏」が導かれる．k と r の間は同じ階梯で，r と H_3 の間に母音が加わり，接尾辞 -o を加えなければ，*$koreH_3$(+s) となり，ここから Gk. kórax「大烏」が得られる．k と r の間がゼロ階梯で，r と H_3 の間に母音があり，接尾辞が加わらなければ，*$kreH_3$(+s)[23]となり，類推によって母音が長くなれば，Gmc. *χrōk- に到達し，ここに OE hrōk，E rook や F freux「ミヤマガラス」までもが端を発している．[n] に終わる接尾辞を加えれば，中型の烏の名ができる．*$koreH_3$-n-ā からは Gk. korṓnē が，*$korH_3$n- からは Lat. cornīx や【指小形】cornīcula がそれぞれ生じ，後者は F corneille に至っている．

9.81 声門閉鎖音は H_1 に想定される二つの音のうちの一つであるが，この音の調音点が声門から舌背・軟口蓋にまで移動し，s の前の H_1 から [k] が生じることもまったくないとは言い切れない．確かにこの想定を支持する事実の裏付けはほとんどない．とは言え，例えば Lat. artifex「職人」に見える接尾辞 -fex (-fak-s)「～する人」は -H_1 に終わる語根を有すると思われるし，動詞 faciō「する」の -k- は -fek-s からの，あるいはむしろ完了 fēcī<*d^heH-H_2e-i【すなわち *d^heH_1-H_2e-i】からの類推によって生じたのかもしれない【Cf. 9.69】．

母音は一つ？複数？

9.82 「喉音」に関する議論は以上をもって終わりとするが，これを受けて印欧語の何れかの発達段階における母音体系を敢えて再建しようとはしないことにしたい．「喉音」理論を考慮すれば，理論的に単一母音体系が想定されてしまうのは明らかである．すなわち，音声学的に言って /a/ のような一つの母音しかなく，これが音声環境によって様々な音色を獲得するのだということになってしまう．諸言語に文証され，あるいは再建形に生じる [i] や [u] は，古い [ay] や [aw] という連続が無アクセント音節で弱化した場合にしかありえなくなる．伝統的な再建法における長母音はすべて，「喉音」であれ何であれ，後続子音の脱落による代償延長，あるいは連続する二つの母音の融合と説明されねばならないのである．コーカサス諸語の例があってはじめて，言語学者は母音が一つしかない言語，あるいはさらに母音音素を持たない言語の存在を検討する勇気を得た．つまり子音はすべて自動的に支え母音を伴い，その質は音声環境によって決定されるというような言語も存在し得る．だが，このような言語を細かく，実際に調べてみると，単一母音体系と考えられるのは，外来語や周辺的・平俗な語彙，さらには俗語を除外した場合であって，さらに，実際に文証もある古語的な要素を共時的に有効であると無理にみなした場合だけなのである．ここから次の結論が得られる．言語学者は正当な根拠をもってここまではよしと線引きを行い規範を決定するのだが，その枠

[22] 原著者に照会したが，意図的に母音あるいは成節ソナントの記載をしていないとのことである．
[23] 原著には誤植がある．原著者に確認済み．

の外をまったく無視することはできず，いかなる言語のいかなる段階であれ，一時点での規範に完全には合わない，あるいはまったく合わないような諸特徴もあって不思議はない．以上を考え合わせると，印欧語の話者が，いかなる時代に身を置いていたにせよ，[i]や[u]を発するのが困難であったとなどとは，とても考えにくくなる[原註10]．ここでF neuf, E new, G neu【<*new-】や，あるいはDan. nu, E now, Lat. nu-n-c【<*nu-, *nū-】に用いられている語根を例にすると，以下の二点が指摘できる．まずは，両者のうちより古いのは副詞の *[nu]であろう．ただしDan. nuでは短い[u]が生じているが，OE nūでは長い．次に，この *nuから「新しい」を意味する形容詞の基体 *new-が作られたと考えられる．つまり，例えばGk. pu-n-th-án-omai「尋ねる」と未来形のpeú-s-omaiに見られるようにuは無アクセント音節にのみ現れるが，こうして得られたewとuとの交替を敷衍したのである．

閉鎖音は3系列？4系列？

9.83 すでに上で触れたように，サンスクリットを出発点としない限り，祖語に無声帯気音の系列を想定すること，すなわちインド語のみに見られる二系列の帯気音が両方とも祖語に存在していたと想定することはできそうもない．実際，サンスクリットの無声帯気音が現れる対応は数量的にかなり少なく，無声帯気音 ph が生じるのは語頭の sph-という連続の場合が多い．一例を挙げるとGk. sphḗn「くさび」，OE spōn「木片」，E spoon「スプーン」とSkr. sphyá-「木のしゃもじ」[24]とが比定される．この場合，初源的な語根は b^h-を有していて，この前に無声の s- mobile が加えられ，そのために b^h-の有声性が失われたのだとみなすことに何の障害もない[25]．サンスクリットとギリシア語に帯気音が生じる場合，ゲルマン語では非帯気音が生じて，Skr. bhにはbが対応するが，これは無声のsの後で自動的にpに至ると期待される．例えばSkr. phéna-「泡」のようにph-が語頭に生じている場合には，spoaynoを示す古プロシア語のような他の言語からすると，s- mobile とゼロとの交替が行われたと考えられる．インド語の無声帯気音は，単純無声音と古い「喉音」の弱化によって生じた[h]との結合であると説明されるケースが大多数を占める．気音を欠くGk. platús と比定される【Skr.】pṛthú-「広い」については **9.5**[26]で触れたし，「道」を意味する語【pathi-】のケースについては詳述した【**8.26**】．ここでは「輪」(F roue) に当たるLat. rotaの例を加えておこう．この語は *roteH_2

[原註10] Cf. André MARTINET, Réflexion sur le vocalisme de l'indo-européen commun, *Homehaje a Antonio Tovar*, 【1972,】p. 301-304. 同文は*Evolution*..., p. 108-113に再掲されている．

[24] 一般の辞書には「木片」に類する意味しか記されていないが，Monier-Williams(1899: 1271)によれば，祭壇に供える粥をかき混ぜる際に用いる剣のような形をした長く平らな木片，あるいは祭壇の形を整えるときに用いる同様の木片を指す．原著に添えられた仏訳«louche de bois»「木の杓子」に合わせて本文のような訳とした．

[25] だが，このような立場を採らない研究者も多い．Pokornyと Watkinsはそれぞれ *sp(h)ē-, *spē-を立てる．また，Mallory & Adams(1997: 33)でシカゴ大学のPaul Friedrichは *H_2osp-「ヤマナラシ」から派生した *H_2sp-ió-からメタテーゼによって *spH_2-ió-＞Skr. sphyá-を導く案を紹介している．

[26] 原著に記されたp. 39は誤りで，p. 134に訂正されるべきである．原著者に確認済み．

に由来し，形容詞的接尾辞 -o- を加えれば，第二音節の母音が脱落し，*rotH_2o- となって，気音を伴う Skr. rátha-「馬車，二輪戦車」が得られことになる．ギリシア語は，platús，póntos「海」，及び hí-stē-mi の語根 -stā-[27]に見えるように，多くの場合このような気音を持たない．だが，Skr. pr̥th-uka「動物の子」と比定される parth-énos「処女」や，Skr. -tha に当たる完了二人称単数の Gk. -tha のように気音が残っている場合もあり，後者は特に注目の対象となっている．

9.84　このようにして，印欧祖語における４系列の想定は断念できよう．だが，こうして得られた３系列が，実際どのような音的特徴によって区別されたのか，という問題が持ち上がることになる．従来の考え方では，これら３系列はそれぞれ無声音，単純有声音，有声帯気音とされた．ところが困ったことに，このような組み合わせを持つ言語はどこにもない[28]．実際，有声帯気音が現れるのは，サンスクリットのように無声帯気音もあわせ持つ言語においてのみである．声門の性質からして，声，すなわち有声性を形成する声帯の振動と，声門間での摩擦とを同時に行うには，声門の前部と後部とで異なる動きを同時に行わねばならない．つまり，前部では声帯が接触し【て声が調音され】，後部には肺からの呼気が通過する隙間が残され【て気音が調音され】るのである．このような微妙な組み合わせは，問題の体系が有声性と気音化という調音タイプを持っている場合には両者の組み合わせとして存在し得るが，これらの調音タイプのどちらかが欠けていれば，その存在意義を失うことになる．無声帯気音は呼称こそ単純な調音とも言えるが，問題の言語にこの音がなければ，有声帯気音は，エコノミー，すなわち最小労力の法則によって，その有声性を失ってしまうのである．このようにして，問題の体系から有声帯気音を排除するならば，伝統的に $*b^h$, $*d^h$, $*g^h$, $*g^{hw}$ と記される系列はこの表記とは異なる実現を持っていたと考えざるを得ない．

9.85　３系列の閉鎖音体系は下記の３種の声門位置を用いることが最も多い．

１）声門の唇状の部分が接近している状態．この状態のまま口腔内での閉鎖が開放され，その瞬間に声帯の振動が開始される．

２）声門がきつく閉じられた状態．口腔内での閉鎖が開放された後【ほぼ同時】に声門閉鎖の開放が聞こえる．これはいわゆる声門化である．

３）声門が広く開いている状態．口腔内での閉鎖が開放された後にもこの状態が若干続けば帯気音となる．

9.86　このような体系において，有声性，すなわち声帯の振動が用いられるのは，母音と，声の支えがなければ良く聞き取れないような一部の子音である．これらの子音は，各々固有の方法・規模で，口腔内の，あるいはさらに鼻腔内の共鳴室で声が響いてはじめて，明瞭に聞こえるようになる．これに該当するのは [n]，[m]，[l]，[r] や，両唇の v（スペイン語の v 及び b）【=[β]】のような弱い調音である．

---

[27] Cf. Skr. sthā-. また，原著で póntos の後に置かれたコンマは誤植である．
[28] Madurese と Kelabit が例外らしい．

9.87　したがって，これらの３系列は次のように特徴付けられよう．１は声門が中間的状態である単純音，２は声門が閉じられた声門化音，３は声門が開かれた帯気音である．舌尖音を例に取れば，これらは以下のように記すことができよう．

1.　t
2.　$t^{ʔ}$
3.　t^{h}

9.88　上記の１については，【口腔内での】閉鎖が開放される前に，後に続く母音を先取りして声帯の振動が開始されることもあり得る．このようなことが行われたとしても，単純音と区別される有声閉鎖音が存在しないのであるから，何の不都合も生じない．このため，上記の体系は次のような状態に至る可能性もある．

1.　d
2.　$t^{ʔ}$
3.　t^{h}

9.89　話者は必要以上のエネルギーを使うことを望まないものであるから，この種の体系においては，帯気音に重きが置かれて声門化が目立たなくなり，2が単純なtに近づくこともあるし，その逆に声門化が強調されて帯気音がなおざりにされ，3が単純なtに近づくこともある．

9.90　発達のもう一つの可能性として，声門化が先取りされて開放が早まり，問題の子音が部分的に有声化することもあり得る．この場合には [$t^{ʔ}$] は [^{ʔ}d] に転じ，体系に有声閉鎖音がなければさらに [d] となる．そうして得られるのは下記の体系である．

1.　t
2.　d
3.　t^{h}

9.91　アラビア語，ヘブライ語，メソポタミアのアッカド語等の祖先であるセム祖語の再建においても，３系列の閉鎖音体系が想定されており，ここでは声門化が用いられる．声門化は今日でもエチオピア語に現れるが，現代アラビア語では「強調」に転じており，「強調」は声門のレベルではなく咽頭で行われ，有声性及び無声性と組み合わさることができるため，結果として４系列の体系が生じている．

1.	d	>		1.	d
2.	$t^{?}$	>	{	2.	ṭ
				2′	ḍ
3.	t^{h}	>		3.	$t^{(h)}$

9.92 これまで単純音と呼んできた音素【=1】はここでは明確な有声音であり，これに呼応して，声門を開いて調音される閉鎖音【=3】の気音はないも同然である．【**9.87** の体系を基礎とすれば】この二つのケースでは声帯の振動が先取りされていると言える．

9.93 印欧祖語に関して，非常に古い時代に声門化音の系列が存在したと考えるのが今日では普通になっている．この声門化音【e. g. $t^{?}$】は声門閉鎖を前置した音【e. g. ʔd】を経て，古典的図式の有声音に至る[原註 11]．下記左欄のような初源的体系が右欄のような体系に移行するのである．

1.	t	>	t
2.	$t^{?}$	>	d
3.	t^{h}	>	t^{h}

9.94 上記のような再建を支持する要因として，再建される最古の段階に *b が存在しないという点がある．例えばラテン語で語頭に b- が現れるのは，外来語の場合や，古い dw- が転じた場合，あるいはまた様々な偶然の結果の場合に限られている．若干例を記しておこう．bonus「よい」は【*】dwenos からの，bis「二度」は *dwis からの転化であり，後者には duō「2」の語根が含まれている．barba「髯」は本来 *farba が期待されるところだが[29]，第二音節の -b- が初頭にも用いられて生じた形である．語頭以外の場合では，barba や verbum「ことば」の -b- は *dh に由来しており，現に英語の対応語 beard と word には d が現れている．また，既に触れたように，ゲルマン語でも祖語の *b に対応する p が現れるのは，外来語や感情的な形成の場合に限られている【**5.64**】．さて，唇音の類に声門化音が欠けていることは，この系列を持つ言語において頻繁に見られる特徴である．Troubetzkoy[原註 12]が記すこのような言語の実に半数以上において，$p^{?}$ は存在しないか，存在する場合には例外的であったり使用頻度が低かったりする．声門化音を発する際の条件を調べてみれば，この事情は非常によく理解できる．このような音を発するためには，口腔内での閉鎖と声門閉鎖とを同時に行い，続

[原註 11] ここで試みたのと同種の再建について，下記の文献が入念に取り扱っている．Thomas V. GAMKRELIDZE, Language typology and language universals and their implications for the reconstruction of the Indo-European stop-system, *Amsterdam Studies in the Theory and History of Linguistic Science*, IV, *Current Issues in Linguistic Theory*, p. 571-609. ここでは有標の概念が特に力説されている．【Cf. Гамкрелидзе & Иванов(1984), 山口(1995).】

[29] <*bhardhā (Watkins). 語頭の *bh>Lat. f は常則．語中の *dh>Lat. d が原則だが，r の前後，l の前，u の後では Lat. b が対応する．Palmer(1954: 228f.).

[原註 12] *Principes de phonologie*, Paris, 1949, p. 165ff.

いて喉頭を持ち上げることによって，閉鎖された二点の間に閉じ込められた空気の圧力を高めねばならない．口腔内での閉鎖の開放が聞こえるようにするためには，このような圧搾が不可欠なのである．口腔内での閉鎖が口腔後部で，例えば口蓋垂で行われる場合，閉鎖された二点の間に閉じ込められた空気の体積はわずかであり，そのため声門を上昇させれば必要な圧力がすぐに得られる．口腔内の閉鎖が硬口蓋や上顎の歯茎で形成される場合には，密閉された部分がもっと広いため，喉頭を同じように持ち上げても内部の圧力はあまり上昇しなくなる．とは言っても，この密閉部は筋肉の塊である舌と骨とで形成されており，その隔壁は強固である【ため声門化音の調音は可能である】．だが，口腔内の閉鎖が唇で作られる場合には，この部位と声門とで密閉された部分の体積は相当大きくなり，その上，問題の密閉部の隔壁の一部を成すのが弱い筋肉組織である頬になってしまう．このような条件の下で声門化音を発するのはかなりの困難を伴うのである．

9.95　声門化音が声門閉鎖音を前置した音を介して有声音に転じるのはよく確認される現象なのであるから，印欧祖語の古層において，ここで 2 と記している $t^{?}$ が d に転じたと想定することにしたいと思う．閉鎖音全体の体系を記せば，左の体系から右の体系への推移が行われたと考えられる．

1.	p	t	k	k^{w}		1.	p	t	k	k^{w}
2.		$t^{?}$	$k^{?}$	$k^{?w}$	⇒	2.		d	g	g^{w}
3.	p^{h}	t^{h}	k^{h}	k^{hw}		3.	p^{h}	t^{h}	k^{h}	k^{hw}

9.96　ラテン語とギリシア語の子音組織を説明するだけでよいなら，後者の図式を出発点にすれば充分である．例えばラテン語では上記 2 の系列が以下のように現れる．【d, g は】duō「２」，genus「種類」の語頭に，【g^{w} は】inguen「鼠蹊部」の語中に，gu が u に弱化して veniō「私は来る」の語頭に (Cf. Goth. qiman[30] = k^{w}iman) それぞれ現われ，すでに触れたように [dw-] から b が生まれた【**9.94**】．1 の系列は pater「父」，trēs「３」，cor「心臓」，quod「何」に現れている．3 の系列は閉鎖が弱まり，まずは f, þ, χ, χ^{w} となり，þ と χ^{w} が排除されて f に転じたため，この系列は最終的に f と h に縮減した．ただし þ, χ^{w} > f は語頭の場合のみであって，語中では音声環境によって様々な結果になる．語頭の例を記しておく．ferō「私は運ぶ」: Gk. phérō (E bear)【<*p^{h}】; faciō「私は作る・為す」: Gk. tí-thē-mi「私は置く」(E do)【<*t^{h}】; hiems「冬」: Gk. kheimŏn「冬」，khiŏn「雪」【<*k^{h}】; formus「熱い，暑い」: Gk. thermós (E warm)【<*k^{hw}】．最後の例で帯気唇軟口蓋音[31]は e の前で規則的に Gk. th となっている．

9.97　上では初頭に帯気音を有するギリシア語形に英語の形を付け加えておいたが，これら

---

[30] 原著に誤植がある．

[31] 原著に記される labiodentale は明らかに labiovélaire の誤りである．

からも窺われるように問題はこれほど単純ではない．3. p^h, t^h, k^h, k^{hw} の系列からはゲルマン語の b, d, g, w も，ケルト語の b, d, g も，スラブ語の b, d, z, g も説明できない．これらの言語では何れも有声音が生じているのである．そこでやはり 3 の系列は，ある段階で，気音と有声性が結びついた音素に転じたと考えねばならない．これはサンスクリットや伝統的な比較言語学で用いられた音素である．だが，この段階で第４の無声帯気音の系列を想定する必要が生じる．ここで３と称している系列の音素[32]と，より古い無声の「喉音」の残存物である [h] とが結合して生じた系列である．例えば【4 の】[t + h] の結合は【3 の】t^h と合一することはなく，前者の声門での調音はより激しいから，両者の差違を明確にするために t^h が弱まり，弱い有声音に転じると考えられる．これら【4 の】強い帯気音 ($t + h > *t^h$) と【3 の】弱い帯気音 ($*t^h > *d^h$) の両者を保持したのはインド・イラン語のみである．ラテン語を含むイタリック語とギリシア語は両者を t^h に合一した．他方，北部ヨーロッパの諸言語は【4】$*t^h$ を $*t$ と合一させ，【3】$*d^h$ は最終的に [d] に縮減した．この [d] は【2 の】古い $*d$ ($<*t^?$) の結果と合一しないこともある．例えば，ゲルマン語は d^h を d とする (E do) が，$*d$ は t としている (E two)．また，ケルト語は Ir. bó「雌牛」[33]に見られるように 2 の系列の $*g^w$ を b とするが，【O】Ir. gonim「私はあやめる」[34]のように 3 の系列の $*g^{hw}$ は g としている．

9.98 ヒッタイト語は，h と転写されることがあっても単純な気音ではなく，固有の子音として，古い喉音の一部を保存しているのであるから，その前史において単純音と [h] との結合から新たな帯気音の系列を生み出すプロセスに参与したのかどうかは興味深い問題である．何れにせよ，ヒッタイト語は，我々がここで呼んでいる 1 の系列と残りの二つの系列は区別しているようだが，2 と 3 の系列を区別した痕跡を持たない．現行の音価推定に従えば，系列 1 と系列 2＋3 は強音と弱音の対立ということになろう．

9.99 印欧語の閉鎖音体系について上で想定した発達は下記のように概括できよう．

	I		II		III		IV
1.	t		t		t		t
2.	$t^?$	>	d	>	d	>	d
3.	t^h		t^h		t^h		d^h
4.					t+h		t^h

9.100 上記 IV はサンスクリットの体系に等しい．ギリシア語とイタリック語に関しては，IV から出発して，3 と 4 の系列が合一したと考えられる．ヨーロッパのその他の言語に関しては，恐らく 4 の系列が 1 の系列に合流したとみなしうる．

---

[32] 原著者に照会したところ，誤記ではないとの回答を戴いた．私見ではやはり 1 の誤記を疑う．

[33] $<*g^w$ou-. Cf. Skr. go-, Lat. bōs, Gk. βοῦς, OCS govędo (R говядина「牛肉」), Gmc. *kūz (OE cū, E cow, G Kuh), etc.

[34] $<*g^{hw}$en-. Cf. Skr. han-mi "I slay", Gk. φόνος "murder", θείνω "I strike", OCS ž ǫ, etc. 現代アイルランド語では

複合閉鎖音

9.101　ここまで触れずにおいたが，閉鎖音には，再建作業において考慮しなければならないもう一つの系列がある．これは，複合的な調音であり，初源的な形態の再建についてはいまだ定説がない．一例に「熊」を表わす語の対応から祖形を考えてみよう．この動物はサンスクリットで ḱkṣa-[35]という形態を取り，ギリシア語では árkto-，ラテン語では ursu-s（<*urcso-s），ケルト語のウェールズ語では arth[36]（<*arkʲo-）である．ケルト語の形態からは *H_2er- が予想され，これはサンスクリットとラテン語から予想される *H_2r̥- と交替する．ギリシア語とケルト語の t がサンスクリットとラテン語のス一音あるいはシュー音と交替しているが，この交替が見られるのは，その前に軟口蓋閉鎖音がある場合に限られている．この交替はまた，斧や目を表わすよく知られた語にも現れる．同種の複合は上記の 3 の系列にも生じる．例えば「大地」の呼称は Skr. kṣam-, Gk. khthṓn である[37]．伝統的な再建においては，この複合の第二要素に無声あるいは有声の歯間音が想定される．これは，英語の thin の th を聞いたとき，外国人が sin や tin とよく混同することから着想を得た考え方である．だが，比較言語学者諸氏の中でも思慮深い方々は，この場合に記される þ は，未決定の音的実現に対する単なる慣例的な表記としか考えていなかった．

9.102　再建される印欧祖語には，複合調音に対応する他の音素もある．*k^w の想定に際して，[k] と [w] の調音が同時になされるとみなしている．だが，[w] の要素は閉鎖の開放の瞬間のみに聞こえるわけではなく，その若干後にも余韻を残すものである．ラテン語の quattuor には [k^w] が想定されるが，これがスペイン語の cuatro で [k]+[w] に転じているのはそのためである．特に西アフリカを中心として多くの言語に，[k] と [p] の調音を結合させた複合音素が見られる．これは [k] の閉鎖と [p] の閉鎖を連続して開放する音であり，肺から上ってきた呼気が，まず舌背と軟口蓋で作られる閉鎖にぶつかり，次に唇での閉鎖にぶつかることになるため，この連続的な開放は明瞭に聞こえる．こうして /kp/, /gb/ と記される唇軟口蓋音の系列が想定されることになる．これらの音が弱まれば k^w 及び g^w に転じやすいことは容易に理解でき，そのため，/k^w/ を持つラテン語の quis が本当は [kpis] に溯ると考えることに何の障害もない．例えばオスク語に想定される *$k^w$is から pis への変化も，単に [k] が弱まることによって [kpi] が [pi] になったと考えれば，遥かに簡単となろう．ラテン語の aqua に由来するルーマニア語の apa の例は，確かに [k^w] が直接に [p] に転じ得ることを示唆するが，その中途の段階でこの [kp] が生じなかったとは言い切れまい．

9.103　本題に戻って，「熊」と「大地」を表わす語のケースを再度取り上げると，khth, kt/kš

---

goinim と綴られ /gónʲimʲ/ と発音される．

[35] 原著には一般の読者の便を考えた記載法が用いられている．原著者の了解を得て，以下では通常の綴りを記す．

[36] 原著で gallois の直後に置かれたコンマは誤植である．原著者に確認済み．

[37] その他の言語における反映等についてはIV章訳註 23 を参照．

の対応から [kt], [gd] のタイプの複合音素を想定できるのではないだろうか．この [kt], [gd] は，二つの閉鎖音の間にあった無アクセント母音の脱落によって生じた *kt, *gd という連続とは異なる．ここから言い得ることに，例えば *oktō「８」のような形態において，いわば $ok^{a}tō$ のように *k と *-t- の間には母音の痕跡が長期間にわたって残存していたと考えられよう．

9.104　上で提案した [kt] のタイプの複合音素は，サンスクリットとギリシア語以外では簡略化した形で現れる．上に述べたようにラテン語の ursus では -s- が，ウェールズ語の arth では th が生じているものの，帯気音である 3 の系列からきれいな対応が見られるのもまた事実である．「大地」の名称の語頭には g^{dh} が想定できるが，この音素が本来の複合性を保っているのは Skr. kṣam- と Gk. khthṓn のみであり，その他のすべての場合に $*g^{h}$ あるいは $*d^{h}$ の反映が見られる．当のギリシア語でも「地面に」は khamaí であり，またラテン語では humī であって，両者は起源的に同一の形態である．「大地」はラテン語で humus であり，サタム語では $*g^{h}$ に規則的に対応する z あるいは ž が生じて，Lith. žẽmė, OPr. semme (=zeme), OCS zemlja となっている．神に対して地上の存在である人間は，接尾辞 -en- を伴って Lat. homō, 属格 hominis, OE guma のごとく呼ばれる．後者の形態は変形によって【E】-groom となり，bridegroom「婿」に残っている．Gk. khthṓn に対応する語に Ir. dū[38]「場所」，対格 don があり，【その派生語の】duine[39]はやはり「人間」を表わす．

9.105　同様の $*g^{dh}$ と $*g^{h}$ との交替は魚の呼称にも現れ，Gk. ikhthûs には複合形【$*g^{dh}$】が，バルト語の諸形態 žuvìs, zuk-, žuk- や Arm. jukn には簡略形【$*g^{h}$】が生じている．上記【4.9ff., 9.73】を参照のこと．

スー音

9.106　上に述べたように，$*g^{dh}$ も $*k^{ʲ}$ もサンスクリットでは kš- となるわけだが，この変化は *tt という連続の奇妙な振る舞いを思い起こさせる．この連続は語根末の舌尖音に接尾辞初頭の t が後続する場合に生じる．この連続がそのままの形で保持されることはほとんどない．その唯一の例外がサンスクリットであり，類推によってこの連続が復活したと考えられる．それ以外のすべての言語で，この連続は -st- あるいは -ss- の形状を取る．例えば，「見る」及び「知る」を意味する語根である *weid-/wid- に接尾辞 -tōr が付加されれば Gk. (w)ístōr「賢人」が得られる．また Lat. pat-ior「私は苦しむ」の過去分詞は pat+tos より passus と説明されてきた．だが，これらの言語でもまた，類推による復活が行われたと考えられる．接尾辞初頭の子音が復活すれば -st- が生じ，語根末の子音が復活すれば -ts- となってさらには -ss- に至ることになる．実際，発達のいずれかの段階で重子音が単純子音に置き換えられたとみなす根拠はふんだんにある．一例を挙げると，“to be”に当たる動詞の二人称単数形は es に語尾 -si を

---

[38] 正書法に従えば dú.

[39] 現在の発音では，本来的な母音である u が非硬口蓋化のしるしとなり，逆に本来的に後続子音の硬口蓋化

加えて作られるから，*essi となって *-ss- が生じることが期待されるが，ギリシア語の対応形は ei であって，その以前の段階には *esi が想定されてしまう．母音間の -s- は規則的に脱落するのである．この *-tt- から *-s- への推移が何によって引き起こされたのかは不明だが，その中途で *-ss- の段階を経たことは間違いない．他方，この現象の原因が杳として不明だとしても，閉鎖音がス一音に転じる推移が存在していたことに疑問の余地はない．この発達を想定することによって説明が与えられることになる形態論的な特徴については後述する【10.36, 10.112】.

9.107　この考えを押し進めると，伝統的再建で一つとされる s が古い複数の音韻タイプに対応していると考えることもあながち無理ではない．上で述べたような *t, *t', *t^h という閉鎖音の三系列を持つ世界の言語の大多数は，[p], [t], [k] のような厳密な閉鎖音の類の他に，様々な破擦音の類，無声音のみを記すと，特に ts や tš，さらには tl-[40] を持つ．だとすれば，我々が再建で用いる一つの *s が三音素を有する一つの類に溯るとみなすことも可能だろう．[ts] を c で表記するなら，これらは *c, *c', *c^h と再建できよう．これらの破擦音が弱まって単純な摩擦音 s に転じる過程が，声門化音の有声音への推移以前に生じたとすれば，これらの三つの単位が交じり合って一つの音素を構成したことにも納得が行く．声門化と帯気音化は閉鎖音あるいは閉鎖音部に加わる特徴であって，摩擦音には関わりを持たないからである．有声音の場合を除いて，摩擦音を発するには声門を全開にする必要があるのである．

9.108　文証される諸言語においても，再建形においても s の出現頻度は高い．上記のようにス一音の類を想定することによって，この頻度の高さに説明が与えられることとなろう．名詞の単純な曲用においても，主格と属格の指標へと発達することになる助詞 (particule) と，複数の指標へと発達することになる要素とは，古代において区別されていたと思われる．ヒッタイト語にもこのような仮説を支持する特徴が見出され，この仮説が広く一般的に様々な言語の音韻体系から今日得られた経験の上に構築されていることを認めねばならない．比較言語学で伝統的に扱われてきたすべての言語において，すべての s は一定の環境において同じ振る舞いをする．

ソナント

9.109　ここまで流音と鼻音については，ソナントというカテゴリーに属すということしか述べていない．ソナントとは，y や w と同じく，子音として働くこともあるし，「母音」として，より正確に言えば音節核として働くこともある音素を指す．アクセントのある音節には母音が生じ，この母音は後代に e あるいは o の形で現れる．アクセントを失った音節では母音が

を表わした i が母音となって，/dínʲə/ と発音される．Cf. Lewis-Pedersen(1937: 98f.). R дьíня の発音に似ている．

[40] 破擦音とすれば，側面摩擦音に終わる [tɬ] が意図されていると思われる．日本語話者にもチあるいはキの子音としてまれにこの破擦音を用いる人がいる．例えば本学の教務課教務係のN氏にこの現象が観察される．

失われるが，もともと母音の後に鼻音や流音の l や r，あるいは y や w があれば，これらのソナントが音節核として機能するようになり，それぞれ m̥, n̥, l̥, r̥, i, u と記される．そのため，これらの子音としての性質が失われてしまうこともある[41]．ただし，これらのソナント相互の区別ははっきりしていたと考えられてきた．

9.110　古代において l と r の区別が脅かされていなかったという証拠はない．側音と顫動音の区別があいまいであったり，あるいは区別がまったくないような言語も世界の各地に多々あり，例えば日本人は villa を bira のように発音する．だが，古い印欧諸言語の中で，この区別があやしいのはサンスクリットのみである．

9.111　鼻音に関して言うと，【m と n】各々の区別に疑義が投げかけられることはほとんどない．再建される語末の *-m が -n として現れることも確かにしばしばある．例えばギリシア語の単数対格や複数属格の末尾がこれに当たる．しかし，祖語において唇音と舌尖音の区別があやしかったと想定する根拠はない．語の内部において，m や n，あるいは [ŋ] といった鼻音の質は隣接する子音によって決定されることが多い．【例えば】動詞の活用において鼻音接中辞と呼ばれる要素がある．これは，Gk. é-lab-on「私は取った」【アオリスト】に対する現在形 la-m-bánō「私は取る」や，Lat. liquī「私は残した」【完了】に対する li-n-quō「私は残す」の場合のように，語根の末尾子音の前に挿入されることのある鼻音である[42]．とは言え，Lat. centum「百」に見られるように -t- の前では -n- が期待されるところだが，この位置でも Lith. šimtas には m が保存されている．これは【*】dekm̥「１０」に接尾辞 -to- を加えて作られた派生語【*】(d)km̥-to-m に由来している．

前置鼻音化音[43]

9.112　ここで -nt- の問題を取り上げねばならない．-nt- にはもともと -n- と -t- の間にあった母音が脱落したことによって生じたものも，centum のように語根末と接尾辞初頭の接触によって生じたものもあるが，これらに当てはまらない複合音の -nt- に出会うことも非常に多い．言い換えれば，-nt- が子音連続ではなく，一つの単位として振る舞うように見える場合が多いのである．加えて，その出現頻度から察するに，二つの音素の結合というよりも，単一の音素であったとも思われる．さて，各々の類において，例えば /d/ のような非鼻音と /n/ のような鼻音の他に，/ⁿd/ のような「前置鼻音化音」(prénasalisée) を持つ言語も世界にはめずらしくない．セネガル人によくある姓に N'diaye があるし，チャド共和国の首都の名はヌジャメナ (N'djamena) であってその語頭には前置鼻音の [ⁿdž] が生じている．またユネスコの事務局

---

[41] 例えば m̥, n̥はギリシア語とインド・イラン語で母音 a として現れる．Cf. (ἑ)κατόν, Skr. śatám, Av. satəm＜IE *km̥tóm「百」.

[42] 後続子音への同化によってそれぞれ m と [ŋ] が生じている．

[43] 原著者は本書（初版）が刊行された翌年にこの問題について Martinet(1988) を発表している．

長の名はムボウ (M'bow) である．鼻音と閉鎖音の間にアポストロフが綴られているから母音が省かれているように感じることだろうが，もちろんそういうことではない．

9.113　だが，この現象はアフリカにのみに見られるわけではない．バスク語の makila「棒」は明らかに Lat. bacillum, 複数 bacilla に由来しており，この例からすれば古代バスク語には /ᵐb/ があったと考えられる．様々なデータの比較によってエウスカラ語には弱い p- と帯気音の p- が想定されるが，ラテン語の b- を写すのにはこれらよりも /ᵐb/ のほうが適当だったのである．例えば，ラテン語で「にわとこ」を表わす sambūcus は sabūcus とゆれており，/ᵐb/ は地中海沿岸地域にかなり広く分布していたと考えねばならない．

9.114　このようにして，印欧語の古い段階に前置鼻音化音が存在していたとみなすこともできよう．特にその可能性が高いのは舌尖音の類であり，例えば 1 の系列には /ⁿt/ が，2 の系列には /ⁿtʔ/ があり，後者は /ⁿd/ に転じたと考えられる．このような調音が，伝統的な唇軟口蓋音[44]に対応する音や，「熊」や「大地」の呼称に残る音のような，他の複合音素に加えられよう．

9.115　前置鼻音化音は母音間ばかりか語頭にも生じる．それが一音素を成すのではないかと考えられるのはこのためである．アフリカの最高峰キリマンジャロ (Kilimandjaro) の名を音節に分けると ki-li-ma-ndja-ro となるのはまず確実だが，ヨーロッパ人だったらこのような切り方はしまい．古い *ⁿt- が語頭にあった場合，文証のある印欧諸語でどのような発達を遂げたのか，よくわからない．【*ⁿt- > [n-] の想定には無理がある．】n- ではじまる語は，否定の場合に用いられるから，テキストの中でまれではないにしても，このような語は印欧諸語の語彙の中ではあまり多くない．*ⁿt- > [t-] という発達も考えられないことはないが，このような発達を支持するデータは発見されていない．

-r/-n- の交替

9.116　印欧祖語において -nt- が特殊な位置を占めていることに注意を向けると，有り難いことに，一連の中性名詞の末尾で -r と -n- とが交替するという奇妙な現象[45]に説明が与えられることになる．この現象は非常に多くの言語に残っているが，特に顕著なのはヒッタイト語においてある．他の言語においてこの現象は淘汰される過程にあって，痕跡を留めるに過ぎないが，ヒッタイト語の場合には生きた派生法に用いられているのである．最良の例は Lat. femur「腿」であろう．この語の主・対格はこの形態を取るが，その他の格の語基は femin- であり，例えば属格形は feminis である．だが類推が二つの方向に働き，主・対格形 femen とその逆に属格形 femoris が形成されることになった．後者は最終的に規範として確立され，ここから形容詞形 femorālis「腿の」が派生している．

---

[44] 原著の labiovélarisées を labiovélaires の誤記とみなした．

[45] いわゆる異語幹曲用 (heteroclitica).

9.117　ある古い段階において，末尾の *-ⁿt が -n の方向に進み，これに押される形で *-n が -r に転じたと想定したいと思う．母音間の *-ⁿt- は -nt- に転じやすいため問題にならない．名詞の中で中性名詞のみが語末の古い n を持ち得た．有生名詞はと言えば，後に男性名詞と女性名詞に発達することになるが，これらは常に語尾，すなわち対格では -m，主格では -s を持っていた．【有生名詞の場合で】語基末の -n- が語末に現れるようになるのはだいぶ時代を下ってからのことである．つまり，主格末尾の連続 n-s は子音連続の簡略化によって排除され【て n となり】，次にその前の母音が【n と合体して】鼻母音化し，その鼻母音もしばらく後に口母音化して鼻音的要素が消滅したが，後になって他の格からの類推で鼻子音が復活したのである[46]．

9.118　確かに -n に終わる中性名詞は多数文証されている．例えばラテン語には flūmen「川」や carmen「歌」をはじめとして数語がある．ここに現れている -men は -ment に，さらには -mn̥t に由来する．*-n が -r に転じた直後に *-ⁿt が -n に縮減したためである．carmen とローマのニンフ Carmenta（切れ目は Carment-a）の名とを比べて戴きたい．

9.119　ラテン語のこれらの中性名詞においては，使用頻度の特に高い主・対格形からの類推によって -n- が他の格にも広がり，そのために属格の形は flūminis, carminis となっている．他方，ギリシア語の対応形では主・対格 -ma (<*mn̥), 属格 -matos (<*mn̥t-) であって，後者では母音に挟まれたため本来の *-ⁿt が保存されている．ラテン語でも，このような中性名詞に接尾辞 -o が付加された場合には，問題の -t- が残っている．古い -men はこのようにして作られた -mentu- に置き換えられることとなり，-ment の形でフランス語の非常に生産的な派生要素として今日に至っている[47]．非中性名詞において，主格の -ont は様々な発達を遂げた．ギリシア語の現在分詞では -ōn となったが，ラテン語では例えば pōns「橋」に見られるように -ons となり，[-ōs] と発音された．

9.120　ラテン語でやはり -er に終わる iter「道」は，末尾の *-n が -r に発達したもう一つの例である．この語の属格の形は itineris であり，また別形の iteris もあって，古い形は *itinis と考えられる．他方，iter は古くは語末にアクセントを持っていた *itér であり，アクセント位置の異なる別形 éitr̥ は Lat. ītur「人は行く，歩行が行われている」[48]を生じている．この -r は非人称性を表わし，後に拡大されてイタリック語とケルト語で受動を表わすようになったのだが，これも結局は末尾の -n に起因するのである【Cf. 10.146】．

9.121　以上を表にまとめておく．

---

[46] 一例に IE *kwon-「犬」を挙げておく．Skr. śvā́ (śvān-), Av. spā (spān-), Lith. šuõ (šun-), Ir. cú (con-) のように非常に古いあるいは保守的な言語において主格末の n の脱落が見える．Gk. κύων (gen. κυνός) の末尾の n は後代の復活による．また，Lat. canis, E hound, G Hund (<Gmc. *hundaz <*kun-to-) は新たな接尾辞を付加して語根の保全を達成している．

[47] 一例に Lat. stabilio "establish"の名詞形 stabilīmen と，その -o- による新形 stabilīmentum, 及び It. stabilimento, F établissement, E establishment を挙げておく．他方，副詞を作る -ment は Lat. mēns の奪格 mente に由来し，「～の心をもって」を原義とする．副詞の -ment については島岡(1991: 26-38)に日本語での簡単な解説がある．

*-n	→	-r		*-^{n}t	→	-n		
*-n-o-	→	-no-		*-^{n}to-	→	-nto		
*-on + s	→	-õ	→ ō	*-o^{n}t-s	→	-onts	→	-õ
								-ons
								-õs

*-b^{h}-/-m-の交替

9.122　前置鼻音を伴う閉鎖音を持つ言語では，このような音が，唇音，舌尖音，舌背･硬口蓋音，舌背･軟口蓋音のように，様々な類に生じるのが普通である．そのため ^{m}b, ^{n}d, ^{ŋ}g[49]のような系列が構成される．上記のような有声音と ^{m}p, ^{n}t 等のような無声音のように，二系列が形成されるのもめずらしいことではない．したがって，印欧祖語に *^{n}t の他に，【*】^{m}p や *^{n}d^{h} を想定することもでき，下記のような前置鼻音化音の体系が得られよう．

*^{m}p	*^{n}t	…	…
..	*^{n}d^{h}	…	…

9.123　古く *^{m}b^{h} が存在したと想定することによって，名詞複数形の一定の語尾を有する諸形態に説明が与えられることになる．【複数】与格，奪格，具格において，多くの古典語は *-b^{h}- と再建される諸形態を持つのに対して，ゲルマン語，バルト語，スラブ語は -m- を持っている．Lat. nō-bis「我々に」と同じ意味の R na-m とを比較されたい．したがって，初源的な形態には *^{m}b^{h} があり，その鼻音性が北の諸言語では優位に立ち，その他の言語では失われたと想定することができよう．【従来の見解に従った場合，】例えばサンスクリットの【複数】与格･奪格語尾は -bhyas，具格は -bhis であり，【古代】ロシア語の場合はそれぞれ -mŭ, -mi であるが，これらには *b^{h}i と再建され，ギリシア語で phi の形で文証される古い助詞が含まれていると考えられる．これは例えば Gk. autós「自分で」の斜格として用いられる autóphi に現れる[50]. この *b^{h}i に母音 e/o が付加されれば，i は y として保持される場合もあるが，Lat. omni-bus の末尾 -bus (<-bos) に見られるように消滅してしまう場合もある．ゲルマン語ではこれは be- の形で G besprechen や E bespeak 等に現われ，sprechen「話す」に対しての besprechen「論ずる，批評する」に見られるように特に自動詞を他動詞化する働きを持つが，また近接や付加を表わす G bei や E by のような前置詞あるいは接頭辞としても用いられる．例えば G Steuer は税金を表わすが，ここから派生した beisteuern は「寄付をする」の意味になる．【他方，このような場合に】問題の仮説に従えば，*^{m}b^{h}i が再建されることとなろう．これに接頭的な要素を加えて「周りに」の意味として，*H$_{2}$e-^{m}b^{h}i を想定することができ，ここから Gk. amphí

---

[48] 自動詞の受動相で一般的状況を表わす，いわゆる impersonal passive construction.
[49] 原著では ^{n}g.
[50] Palmer(1980: 45), Meier-Brügger(1992: II, 67) 等を参照されたい．

や，ゲルマン語では第一要素の母音度がゼロとなった $*H_2{}^{m}b^{h}i > *H_2\underset{\circ}{m}b^{h}i$ を経て，OE ymb や G um が得られる．Gk. amphí には「～の両側に」の意味もあるため，双数の接尾辞 -ō を加えた Lat. ambō「両方の」と比定されねばならない．これと同じ意味で，ゲルマン語は接頭要素の H_2e- の部分を除いたこの基底形を用い，語頭の $*^{m}b^{h}$ を $*b^{h}$ とした．ここから G beide や E both，あるいは $*b^{h}$ei に指示代名詞を加えた $*b^{h}$ei-yo- より Dan. begge 等が得られる．

9.124　我々がここで想定している前置鼻音は，言語によって，また語頭や母音間，あるいは語末といった位置によって異なる発達を遂げることになるが，これは大して驚くべきことではない．一般的に言って，前置鼻音は語頭では失われ ($*^{m}b^{h}i > b^{h}i$)，語末では鼻音が残って口腔での閉鎖音が失われる (*-nt>-n) ものであり，どちらの場合にも音節の中心から遠い要素が排除されている．母音間ではどちらの要素も保持されるが，もともと te-^{n}te であった音節の切れ目が ten-te となって，かつての複合音は連続する二つの音素と扱われることとなろう．文証される -nt- の中には，古い -net- というつながりから -e- が脱落して生じたものもあることだろう．ということは，*te-ne-te に由来する *ten-te- も，*te-^{n}te 由来のそれと合一したということになろう．これは驚くに値しない．文証される印欧諸語において，古い単一音素と，連続する音素の組み合わせが合一することがあるのはよく知られた事実である．例えば，ラテン語の qu は古い $*k^{w}$ ばかりでなく母音が後続する場合の *k+u という組み合わせにも対応している．Lat. -que は Gk. -te や古いゲルマン語の -h に対応しているため，$*k^{w}$e に由来するが，他方 Lat. equos【>equus】は，恐らく Gk. ōkús「速い」と関係する古い *eku-「速い」に形容詞的な接尾辞 -o を付加して作られた派生語である．同様に Lat. inguen「鼠蹊部」は Gk. adḗn「腺」と比定され，$*g^{w}$ を有する *$\underset{\circ}{n}g^{w}$en- が再建されるが，Lat. lingua「舌，言語」には既に述べたように $-g^{h}$+u+eH_2 という連続が現れている【Cf. 8.16ff.】．

9.125　$*^{m}b^{h}i$ に由来する諸語尾において，$*^{m}b^{h}$ が言語によって $*b^{h}$ になったり m になったりしている点は，以下のように説明できよう．南方諸言語においては，Gk. phi に見られるように，$*^{m}b^{h}i$ はある程度の自立性を保持した．これによって語頭に期待される $*b^{h}i$ が得られる．-m を示す北方諸言語においては，$*^{m}b^{h}i$ が i を失って比較的早期のうちに語尾化したと考えられる．ロシア語の与格 na-m やグループは異なるが *-b^{h}os に由来するラテン語の語尾 -bus などで i の痕跡が見られないことを説明するには，この脱落を想定する必要がある．$*^{m}b^{h}i$ の変化は下記のように整理できよう．

$*^{m}b^{h}i$	→ $*b^{h}i$	副詞，後に前置詞に転化：G bei, E by
	→ $*b^{h}i$	融合していない助詞：Gk. phi
	→ *-$b^{h}i$	後に融合し，語尾に：Skr. -bhy-as, -bhi-s
	→ -m	早期のうちに融合し，語尾の一部に．融合していない助詞の $*b^{h}i$ と共存．北の諸言語では -m が，ラテン語等では $*b^{h}$ が，それぞれ類推によって拡大した．

	唇音	舌尖音	溝型音	舌背音	唇軟口蓋音	舌尖軟口蓋音	声門音	
摩擦音				ʕ	•			咽頭音
				ḥ	•			咽頭音
				•	ʁ^{w}			口蓋垂音
				χ	χ^{w}			口蓋垂音
閉鎖音	p	t	ts	k	kp	kt		
		t^{ʔ}	•	k^{ʔ}	kp^{ʔ}	•	?	声門閉
	p^{h}	t^{h}	•	k^{h}	kp^{h}	kt^{h}	h	声門開
前置鼻音化音	•	^{n}t	•	•	•	•		
		^{n}t^{ʔ}	•	•	•	•		声門閉
	^{m}p^{h}	•	•	•	^{ŋ}kp^{h}	•		声門開
鼻音	m	n						
流音		l						
		r						

印欧祖語最古層に想定される諸音素

黒丸が記されている箇所は，可能ではあっても想定する根拠の薄い音素である．

表中の同じ列の中での閉鎖音といわゆる「喉音」の配列については説明を加えておかねばならない．「舌背音」の列に置かれた諸音素は，確かに舌の「背面」，すなわち上面によって調音される．だが，この器官が接触あるいは接近する部位には相違があり，閉鎖音の場合だと軟口蓋となるが，摩擦音の場合には口蓋垂と咽頭後壁である．閉鎖音と摩擦音の対立のみを弁別的とみなし，この差違は無視した．唇軟口蓋音についても同様である．また，唇軟口蓋音の場合，唇軟口蓋性を表わすのに閉鎖音については [p] を，摩擦音については [^{w}] を用いた．咽頭音と口蓋垂音では，第一行目は有声音，第二行目は無声音である．

アクセント

9.126　音韻論の章を終えるに前にアクセントの問題に立ち戻らねばならない．ここまでずっと用いてきたアクセントの概念は次のようなものであった．すなわち，印欧語のある発達段階において，アクセントを持っていた母音は保持されるが，アクセントを持たない母音は消滅するか，あるいは少なくとも弱まるとするものである．加えて，子音だけでは音節核の機能を果たせない場合，子音連続の発音ができるようにするために必要な母音が保持されることもあった．さらに，その後，アクセントの事情が変化して，類推による母音の復活が生じた．

9.127　このような非常に早期のアクセントが想定されているわけだが，各所で改新が生じている．そのため，想定される母音の大量脱落以前のアクセントの位置とその性質について究明するに際し，サンスクリットにもギリシア語にもラテン語にも全幅の信頼を置くことはできない．5.66 に記した Verner の法則に隠された交替によって判明するように，もっとも長く初源的なアクセントを保存したのは恐らくゲルマン語である．ドイツ語の ziehen「引く」と ge-zogen（過去分詞）に見られる -h- と -g- との交替から，かつてのアクセントは現在形で *déuko-[51]の語根に，過去分詞 *duk-ón で接尾辞にあったことが窺われるのである．前者には二重母音起源の長い ū を持つ Lat. dūcō「私は導く」が，後者には別な接尾辞を有する Lat. ductu-s【過去分詞】がそれぞれ対応している．かつてのアクセント位置は【アクセント下で母音 e を保った】-eu- と【母音を縮減した】-u- によっても確認される．

9.128　アクセントが上記のような働きを持っていた時代に，その位置は一般的な原則で決定されていたのであろうか？ これはよくあることであり，チェコ語やハンガリー語では第一音節に，ポーランド語では次末音節にアクセントが置かれるし，ラテン語では次末音節の長さでアクセント位置が決まっている．このような場合には固定アクセントという呼び名が用いられる．それとも形態によってアクセント位置が変わったのだろうか？ 一連のデータを根拠にすれば，ある時代に，アクセントは語の末尾の要素，すなわち語根か接尾辞に置かれる傾向があり，一部の語尾はアクセントを引き付け，その他の語尾の場合にはアクセントはその前の音節に置かれたとも考えられる．これらのことがらについては，以下で文法について述べる際にも触れる．

9.129　ここでは次の指摘に留めておきたい．アクセントが古代演劇の神 (deus ex machina) のように天から舞い降りてきて，そのために母音が損なわれたのだ，などという考えは空想であって現実とは異なる．このように単純に考えれば事実が簡単に把握できるから，上でそのような空想を抱いてしまった向きもあろう．現実はこうである．談話の中には情報的価値に乏しい要素もあり，諸要素が集まって形式的に特徴ある品詞が形成されるに従って，そのような要素自身は弱まり，それを発するのに必要であったエネルギーの大部分が，情報量に富

[51] アクセント位置を明示した．

んだ隣接要素へと移行するのである．換言すれば，母音を間引くのは強いアクセントではなく，母音の弱化なのであって，その結果として，残った母音は強められることになる．アクセントの本来的機能は，発話の中の様々な部分どうしの区別がはっきりするように，及びそれらのうちのどれかを強調するために，諸部分にメリハリを付けることである．アクセントの第一の機能は，境界の画定，あるいは，控え目に言えば，頂点の表示である．つまり，発話の中で中心的情報を持つ要素の存在を示す頂点を形成することである．

声調

9.130　声調とは，音節の中心的な母音核にかぶさる，談話の旋律曲線の独特の動きを意味し，原則としてアクセントと声調とは無関係である．声調を持つ言語においては，同じ子音と母音の音素からなる音節がこの動きによって区別される．例えば中国語では mā「母」，má「麻」，mǎ「馬」，mà「罵る」は別々の語である．声調言語にアクセントが発達すると，それによって無アクセント音節の母音が不明瞭になったり，そのような音節の声調が失われたりする．そのため，声調がアクセント音節のみに現れたり，例えば，アクセントが別々の声調と同時に生じる場合，二つの「異なるアクセント」があるという少々誤った言い方が用いられるのもめずらしいことではない．

9.131　フランス語にはきちんとしたアクセントがないから，フランスにはこの方面に疎い比較言語学者がおいでである．このような人たちはギリシア語の知識をもとにして，印欧語のアクセントを論ぜず，代わりに「声調」【単数】という言い方を始終用いている．だが，言語に単数の「声調」などありえない．声調は対立する単位であり，すなわち声調は常に二つ以上あるはずなのである．印欧語の発達過程において，声調が生じたことは確実である．声調は現に古典ギリシア語，バルト語，セルビア・クロアチア語，スカンディナヴィア語に存在している．だが，たとえ何らかの平行性があったとしたところで，これらのうち最も古いものも確実に印欧祖語時代に溯ると言えるわけではない．

9.132　声調の対立は，二種の異なる母音延長が時間的にずれて生じたことから発生したと思われる．はじめに行われたのは，主格の -s のような後続子音の脱落による母音の代償延長である．旋律的な頂点はもちろんその長母音のはじめに置かれたことだろう【頭高】．次に現れたのは，曲用の中で連続する二つの短母音が融合することによって生じた長母音である．これらの二つの短母音のうち融合以前にアクセントを持っていたのは後続の母音であり，融合後に旋律的な頂点は長母音の終わりに置かれることになった【尻高】．その後に，単母音＋「喉音」から喉音が脱落したために代償延長によってさらに新たな長母音が発生した．これは新たな頭高の長母音であり，その出現によって，尻高の台頭に敗色が濃かった古くからの頭高の勢力が増し，両者が併存するに至った．バルト語に残されているのはこのような状況と思われる．

9.133 当然ながら，非常に早期の段階において，印欧語に声調の体系が存在したと想定することには何の障害もない．だが，たとえそうだったとしても，目に見える痕跡はこれ以上ない．

参考文献（補遺５）

Palmer, Leonard, R. 1980. *The Greek Language*. London: Faber & Faber.

Meier-Brügger, Michael. 1992. *Griechische Sprachwissenschaft* I-II. (Sammlung Göschen 2241, 2242) Berlin: Walter de Gruyter.

Martinet, A. 1988. Prenasalization in Proto-Indo-European, *Belgian Journal of Linguistics*, vol. 3.

Гамкрелидзе, Т. В. & Иванов, Вяч. Вс. 1984. *Индоевропейский язык и индоевропейцы* I-II. Издательство Тбилисского университета.

Mallory, J. P. & Adams, D. Q. (eds.) 1997. *Encyclopedia of Indo-European Culture*. London & Chicago: Fitzroy Dearborn Publishers.

(1999.10.14 受理)